2022年１１月１日発行

点訳通信 113号

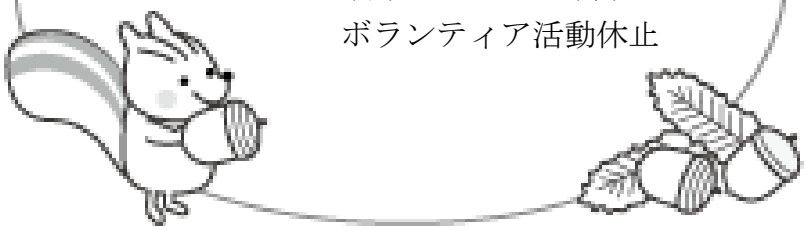
日本ライトハウス情報文化センター
点字製作係
発行責任者　竹下　亘
〒550-0002　大阪市西区江戸堀1-13-2-8F
TEL 06-6441-1028（点字製作係直通）

この間立ち寄った和菓子屋さんの入口に、「紫式部」の鉢植えが飾られていました。触らせてもらうと、小さな粒が集まった実をつけていて、なんとも可憐な様子でした。赤みがかった紫色の実は、葉っぱとのコンビネイションがとても綺麗なのだそうです。調べてみると、英語では「Japanese beautyberry」と言うそうで、ピッタリの名前だと思いました。植物が華やぐ季節は春という印象ですが、紅葉が深まる物寂しい秋も私は好きです。
皆さんはいかがですか？　（点字製作係　奥野真里）

(C)aisatsubun.com

【休館等のお知らせ】

１１月　３日(木)　祝日のため休館
１１月２３日(水)　祝日のため休館
１２月２８日(水)～１月５日(木)
ボランティア活動休止



(C)WANPUG

連絡事項

現在、２０２２年度点訳ボランティア養成講習会を行っています。
１０人の受講生は１２月に講習会を修了し、２０２３年１月から新たなボランティアとして当館の点訳活動に加わる予定です。
今後、各曜日・グループに調整させていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

第３５回専門点訳講習会レポート

毎年、毎日新聞大阪社会事業団と共催で開催している専門点訳講習会。この秋に２種類の講習会を開講しました。以下に講習会の感想をご紹介します。

(C) WANPUG

１．「写真・図・イラスト点訳コース」

点訳中に、写真の多い本に遭遇して戸惑ったり、イラストや図をどのように説明したらよいか悩んだりすることはありませんか。多くの書籍に視覚的資料が掲載されるようになり、点訳する際に敬遠されがちですが、その処理方法を心づもりしておく必要があります。

時には点図を活用することもありますが、今回は、言葉による補足説明で理解できるよう点訳する方法を学びました。

(C) WANPUG

「写真・図・イラスト点訳コース」を受講して　　大杉（おおすぎ）　敦子（あつこ）（土曜日）

対面での受講は本当に久しぶりで、緊張感もあり、質疑応答ができて、とても良かったと思います。また、課題の解答では、受講者の皆様が色々と工夫されたところや考え方等を伺うことができ、読者のことをよく考えられていると感心しました。私は、点訳ボランティア活動に参加してまだ２年なので、受講レベルに達していないのではと少し躊躇しながらも申し込みました。写真・図・イラストの点訳に関しては、ほぼ初心者です。写真等を言葉にして点訳するのは、本当に難しいと思いました。

この講習会で、誰に・何を・どのように、客観的・簡潔・明解に伝えられるか、点訳挿入符の使い方や適した挿入箇所などについて学びました。特に客観的な物の見方や考え方、それに表現方法も様々あり、答えが１つではないのが、私には難解でした。

１回目の講習会の終わりに２問宿題がでました。１問目は、質問にひとつずつ答えて、各々にあてはまる点数を合計する表の点訳、２問目は絵本の点訳です。私は宿題を前にして頭の中で考えがグルグル回り、なかなか着手できませんでした。１問目の表はどのようにレイアウトするのか？点訳挿入符はどこに入れるのか？配点はどのように点訳すればいいのか？点数の合計欄には空白が必要なのか？等、とても悩みました。

２問目の絵本は、１ページに５つの絵が描かれていました。児童を対象にした点訳で、楽しさが伝わる言葉を選ぶようにとのことだったので、どんな言葉が良いのかと、ここでも悩みました。

そして提出した解答は、まさかの結果に。最後に配られた模範解答は、とてもスッキリしていて簡潔なもので、私の解答と比べると、もう笑うしかない状態でした。

児童書の点訳では「です・ます」調が適していること、本文に即したキーワードが入っていると想像しやすいこと、説明が長いと読む意欲がそがれること、位置関係を伝える際には基準になるものを決めて、それを中心に示すとイメージしやすいこと等の解説があり、納得しました。

(C) いらすとや

本を注意深く読み込み、その都度案を作って、ボランティアの方々と相談しながら考えることが、客観的で良い点訳になるのだと思いました。

２．「教科書・教材点訳入門コース」

年々、地域の学校で目の見える児童･生徒と一緒に学ぶ「インクルーシブ教育」を選択する点字使用の子どもが増えています。それによって、教科書や教材の点訳依頼が増加しており、場合によっては製作が追いつかないことがあります。児童･生徒の学習に支障が出ないようにするために、新たなボランティアの方々に関心を持っていただけるよう、教科書点訳の取り組み方や製作実態について学びました。

(C) WANPUG

「教科書・教材点訳入門コース」を受講して

大安（おおやす） 徹雄（てつお）（水曜日）

情報文化センターで点訳ボランティアを始めて５年になりますが、大半が一般書でした。今回、スキルアップの目的で受講しました。

まず、大阪府教育庁の方から「学校教育法施行令の一部改正」「障がい者（Ｈ２０以降、マイナスイメージの漢字をやめ、ひらがな表記を奨励）差別解消法」に基づいて、「ともに学び、ともに育つ」教育を推進している説明がありました。大阪府が全国でもインクルーシブ教育の取り組みが進んでいることを実感しましたが、視覚障がいのある高校生の支援については、約１０人程度（過去の全盲生徒在籍数）と少ない印象を受けました。

次に、大阪南視覚支援学校の先生の話は、実施現場での経験に基づいており、興味深いものでした。しかし、インクルーシブ教育だけでは十分でなく、「支援学校」との併用。通常とは別に授業を受ける「通級指導」も必要とのことでした。支援学校との併用と言っても、進んでいる大阪でも支援学校は北と南の２校しかなく、かなりの制約があるようです。そこで、支援学校側から一般校へ訪問指導を行っているが、一人ひとり理解力・環境等が異なるため対応の難しさ、現場の先生の負担大など数々の問題があり、試行錯誤の中で「インクルーシブ教育」は進行していると思われました。

そこで、我々点訳ボランティアの登場となるわけですが、「ともに学び、ともに育つ」教育のための教科書・教材づくり。大変な役割・役目だと思いました。大袈裟に言えば、自分が点訳した教科書によって、その児童･生徒の学校生活が左右される。それくらいの気持ちが必要ではと考えてしまいました。

技術的にも、ビジュアル化が著しい教科書のレイアウト・写真・イラスト・表・地図・グラフ等の処理。学ぶべきことが山ほどあると思いました。原本通りにトレースしても、触読できないケースが多々あるとのことで、文字は別として、エーデルでの作図では点の大きさ・種類・間隔も児童の指になった感覚が必要ということでしょう。一般書以上に、読む人のことを思う気持ちが大切だと痛感しました。

７０年近く前、他にほとんど娯楽もなく、学校から新しい教科書を貰ってパラパラめくり、これから習うことに胸躍った記憶が蘇ります。（高学年になるにつれて、見るのも嫌になっていきましたが。笑）

我々が作った点字教科書を待ってくれている児童･生徒がいると思うと、やりがいも出るものです。また、その期待にそえる物を作らなければと思いますが…。

（写真：開講式の様子）

点字の意義を学ぶ
～全国視覚障害者情報提供施設協会全国大会から～

１０月１２日・１３日の２日間にわたり、大阪会場を拠点にオンラインを併用し、全国視覚障害者情報提供施設協会の全国大会が開かれ、全国の点字図書館やボランティアグループなど約４００人が参加しました。そのうち、点字の価値や意義について発表・議論した全体会の様子を、感想を交えながら紹介します。

(C) WANPUG

点字を自分の文字として獲得する「かっこよさ」に感銘

点字製作係　大下 歩

「もう点字しかないから、やらなきゃいけない」から、「いろいろあるけど、点字もやりたい」へ。点字を学ぶ人の動機が変わってきている…。

１０月１２日・１３日、第４７回全視情協大会。「点字文化の価値を改めて考える」と題された２日目のセッションの中で、私が特に印象に残ったのがこれ。京都ライトハウス鳥居寮の石川さんのお話でした。

鳥居寮は、視覚障害リハビリテーション施設。２０２１年度は３２人が点字を学ばれました。積極的に点字で読書などをしている方もいれば、メモを取る程度の方、体験だけでやめられた方など、点字との距離感はさまざまだそうです。

冒頭の変化は、ＩＴ機器が発達し、多くの情報を合成音声で得られるようになった結果だといいます。「点字文化の危機」と言われますが、裏を返せば、そのおかげで自分に必要な分だけ、心に余裕を持って点字を学べるのだと気づかされました。

その証拠に、訓練生の皆さんはとても楽しそうです。「この本は面白いから、全部点字で読む」、「エレベーターの点字が読めたよ」、「点字読めたらカッコイイじゃないですか」。自分の思いを形にして残しておける、人が書いたものを味わって読める、文字というものの素晴らしさを改めて感じずにはいられません。

もしも「点字を使えなければ、何の情報も得られない」としたら？後天的に視力が下がり、ただでさえ生活が激変している人にとって、その負担は計り知れません。点字の勉強はきっと、もっと重苦しく、切羽詰まったものになることでしょう。

もちろん、たくさんの分量を速く正確に読み書きできたり、点字のより良いあり方を考えたりすることは大切です。そういう人がいてこそ、点字は水準を保てるし発展するからです。私も点字図書や教科書を提供する立場として、そういうスキルを身につけたいです。

でも、ピアノを習う人が必ずしもピアニストを目指さなくていいように、点字を使う人が必ずしも速く・たくさん・正確に使いこなす必要はない。自分のニーズを満たせればいいのです。いちばん大切なのは、その人の生活が豊かになることだからです。

そして、それが結局のところ、点字文化を絶やさない方法であるように思います。「音声でもいいけど点字もできるといいかも」程度にハードルを低くしておくことが、点字を使う人を増やすことにつながるのではないでしょうか。